

# 研 修 報 告

## 平成16年度経済関係企画職員研修・個別課題コース

### リスクコミュニケーション入門 [平成17年1月27日～2月18日]

本研修では、前半はリスクコミュニケーションを中心としたリスクアナリシスの考え方および農林水産分野における内外の政策動向について講義形式で研修が行われました。

また後半は、リスクコミュニケーションに関する演習が行われました。具体的には、研修生がプレスリリースや住民説明資料を作成し、報告すると共に、その報告の様子をビデオ撮影し、全員の前で再生することで、作成したプレスリリースの内容だけではなく、発表時の言葉づかいや態度について講評を受けるというものです。自分の発表の姿を、客観的に見つめ直す機会が得られた非常にユニークな研修になりました。

#### 【講義日程】

日 時	講 師	時 間	講 義 内 容
1月27日	西尾 健(農林水産政策研究所長)	30分	リスクコミュニケーション入門
	姫田 尚(農林水産省消費・安全局消費者情報官)	60分	農林水産行政におけるリスクコミュニケーションの現状と課題
2月2日	山田友紀子(農林水産省消費・安全局消費・安全政策課長)	90分	リスクアセスメントとリスクマネジメントの理論と実際
	中嶋康博(東京大学助教授)	60分	ヨーロッパを中心とした食品安全行政の改革と日本への示唆
2月10日	木下富雄(甲子園大学学長)	240分	リスクコミュニケーションの思想と技術
2月17日	木下富雄(甲子園大学学長)他	240分	演習(0157に関するプレスリリース)
2月18日	木下富雄(甲子園大学学長)他	360分	演習(土壌汚染に関する住民への説明)

注. 2月17～18日の演習では、木下学長の他、以下の先生にご指導をいただきました(順不同). 吉野絹子(神戸学院大学人文学部教授), 金川智恵(甲子園大学人間文化学部教授), 竹西亜古(甲子園大学人間文化学部助教授), 福井誠(甲子園大学現代経営学部助教授).

### 見るのと体験するのはやはり違う - リスクコミュニケーション(RC)演習を体験して -

生活技術研修館 長岡 明

「いや～、脇で見ると実際に自分でやってみるのとでは、何となく分かっているつもりでもかなり違いますね。」というのが最初の率直な思いであるが、感想を述べてみたい。

## 1. 受講の目的

生活技術研修館では、消費・安全局のお力添えを得て、平成15～16年度に、都道府県の普及職員および市町村職員を対象とした「食の安全・安心」に関する研修を計3回実施した。地方公共団体職員の場合、現場に近い住民に接する機会も多いので、RCに関する知識と技術は必須と考え、16年度はその講義と演習を取り入れたが、この分野について全く知らなかったという受講者も多く、大変に好評であった。これを受けて、17年度にもRCを主眼とした研修を予定しているが、今回の受講は、その充実を図るための知見を得ること、また、RCについての自らの理解を深めることも目的であった。

## 2. 体験してみて

### (1) 当たり前だが、自分でやらなきゃ分からない

当館でのこれまでの研修や書籍などで、RCについてある程度は見聞きし、受講者によるロールプレイングに際しては、住民役の鋭い質問に対して的確に受け答えのできる方々を感心して脇から見ていた。しかし、いざ自分で体験してみると、これが簡単ではないことがよく分かった。前に出ると、あがってしまって目線や資料の持ち方まで気が回らない。

### (2) ビデオで自分を見るのは嫌だが、改善の刺激になる

誰でも同じであろうが、自分が話す姿をビデオで見るとは気恥ずかしいものである。しかし、たとえば“早口”というこれまで感じていた欠点が思っていた以上であることがよく分かり、住民説明会の場でなくとも、教壇に立って話をする機会もあるので、大いに参考になった。分かっているが改善できない点も、見せられ聴かせられると、「次は何とかしなくては」という気になる。シミュレーションでなく、マスコミや住民を相手に実際に対応するとしたら、まだまだ習熟しなければならないことを痛感したが、そのきっかけがつかめたのは大きな収穫であった。

### (3) 文書作成が大変

限られた時間の中で資料のポイントを読み取った上で、説得力があって、訴訟に耐えられることまで配慮した文書を作成するのはかなり厳しい。なお、本研修をこれから受講される方に一言。パソコンは使い慣れたものがよい。キーの配置が微妙に違えば、打ち間違いはかりで時間がかかって慌ててしまい、できあがったペーパーに誤字が多くなる。

## 3. 雑感

消費者団体や住民側もこのような研修を受講したらどうかと考えた。実際には、事故などが起こった場合に住民側は記者会見等を行う側ではない、行政や企業側にとって、いわば“手の内を見せる”ことになる、住民側が時間とコストをかけて研修を自ら行うとは考えにくい、といった面もある。しかし、関心事項についての科学的な知見を得るため勉強会を開催する消費者団体もあると聞くと、講義の中でお話のあった、RCの眼目である「共考」と「信頼感」のためには良いことだと思うのだが。何しろ、住民側はコミュニケーションの重要な一端を担うのであるから。

最後になるが、講師の先生方およびこのような有意義な研修を企画していただいた関係の皆様方に感謝申し上げたい。

### 「リスクコミュニケーション入門」研修受講の感想について

消費・安全局農産安全管理課 島村 博子

この研修を終えて、一番実感したのは、リスクコミュニケーションでの対応を大きく誤解していたことです。職場では、「××に関するリスクコミュニケーションについて」と頻りに実施報告が回覧されてくるし、現在の仕事でも実施が予定されているし、その必要性も分かっているつもりでいましたが、実際、その場に立たされると「国側の見解を説明する場」としてしか理解していなかったことでした。

2月17日、18日と甲子園大学学長木下先生のご指導の下、リスクコミュニケーション演習に参加してみて、自分の態度、説明にそれがありありと出ているので、非常にショックでした。緊張していたこともありますが、視線を1回も上げず、相手に聞かせる必要のある部分にメリハリも付けず、原稿を正確に読むことだけに専念し、表情も無表情で、問答無用というような印象は本人が見てもコミュニケーションの内容を聞く前から相手を不愉快にさせることは必至だと思いました。お役所言葉は一般の消費者等からはいやがられることは分かっていたのですが、長年？の勤務ですっかり身に付いてしまっていることも痛感しました。

さらに、2回目の演習でも前回の指摘点が全く改善されていないことに初回より大きくショックを受けました。前回同様、対応の不手際と併せて、敷地内で地下水汚染を引き起こしたガソリンスタンドの経営会社の環境問題責任者として、近隣の農家、ビール工場経営者、地主等に対して風評被害の責任についてどう対応するかという質問に、1にも2にもまずは水質検査を実施し、その結果を見て判断すると一点張りの答えしか出来なかったことについても、ますます近隣住民との間に溝を生じさせてしまったと反省させられました。対応可能な対策については、あらゆる角度から考えておかなければならなかったし、具体的な対策が打ち出されていないくても、そのような対応も検討する余地があることを説明出来たと思いました。

「リスクコミュニケーションを行うときは、信頼性を確保するため、相手の立場に立って考え、フェアな対応をする。」簡単なようで非常に難しいことで、今後も自分にそのような対応ができるか研修を受けた今でも自信がありません。「いかに効率よく、政策（事業）を理解してもらい、実施してもらうか。」のいままでの相手に対しての仕事の進め方を転換させる必要性を切実に感じました。

現在は、遺伝子組換え生物等の使用に関する申請案件を取り扱うポストにいますが、法で規定された事項について生物多様性影響評価に基づき処理をするなかで、消費者等からの遺伝子組換え生物に関する不安感・不信感をくみ取りながら、進めていくということは至難の技のように思えます。